

# 武蔵野 ヒストリー

武蔵野にまつわる歴史を  
楽しみながら学ぶ



## 武蔵野クリーンセンター

経済成長と住民の増加とともに激増するごみ問題を解決すべく昭和59(1984)年に完成した旧武蔵野クリーンセンター(写真上)。用地の選定から建設、運用まで、市民参加による一大プロジェクトは、いかに成し遂げられたのでしょうか。その歴史を振り返りながら、武蔵野市のごみ処理のこれまでとこれからの見つけます。

### ごみ焼却場で

周辺住民の反対運動が勃発  
武蔵野市のごみ搬入を阻止

武蔵野市が、市の業務としてごみ処理を行うようになったのは戦後まもない昭和23(1948)年のこと。市内の一部地域を対象に申請方式でごみが収集され、生ごみなどの塵芥は地域の農家で家畜の飼料やたい肥として利用、その他の雑芥は市外の焼却場へ運ばれて処理されてきました。

昭和30年代に入ると、隣接する三鷹市とともに「武蔵野三鷹地区保健衛生組合」を設立し、武蔵野市は伝染病棟の維持管理を行い、三鷹市はごみ焼却場を維持する分担制となります。三鷹市新川に「ふじみ焼却場」が建設され、三鷹市のごみとともに武蔵野市の塵

芥・雑芥もここで処理されることになりました。時代はまさに高度経済成長期。両市ともに人口増加に伴う消費の活発化と比例してごみの量も増加し、焼却炉の増設や運転時間の延長を余儀なくされました。

人々の生活が豊かになるにつれて増え続けるごみと、それに対応して処理をし続ける施設。そんな中、昭和43(1968)年ごろ、ふじみ焼却場に隣接する調布市の市民から、騒音や悪臭、ばい煙などの環境改善に対する苦情が始め、さらに昭和46(1971)年と48(1973)年には、複数回にわたって焼却場入口で調布市民によるピケ(座り込みの抗議活動)が行われ、武蔵野市のごみの搬入が阻止される事態となりました。

折しもこの頃は、都市部を中心に公害問題に注目が集まり、ごみ焼却場も

周囲の環境を悪化させる施設として、たびたび取り上げられました。

武蔵野市のごみは武蔵野市で  
市民参加による議論を経て  
武蔵野クリーンセンターが誕生

前述のふじみ焼却場周辺住民の反対を受け、時の後藤市長は、「武蔵野市内に焼却場を分離して作るよう努力する」と宣言。昭和53(1978)年の市議会では、クリーンセンター建設予定地を市営プール地に選定すると発表しました。ところが、市営プール地の周辺住民や市議会の合意は得られませんでした。周辺住民の思いは反対運動に発展し、昭和54(1979)年には、「武蔵野市のごみ問題を考える連絡会」を結成。市内全戸にビラを配り、「用地選定は市民参加で」と問題提起をし

たのです。

その結果、同年12月には「よりよい場所に よりよい施設を」をスローガンとする候補地の周辺住民と一般市民、専門家35名からなる「クリーンセンター建設特別市民委員会」が発足。市営プール、市営総合グラウンド、武蔵野中央公園、小金井公園の4つの候補地の周辺住民も交えながら新たな検討が始まりました。委員会は、候補地の



クリーンセンター建設予定地となった市営総合グラウンド(1980年)

見学や勉強会などを行い、議論を重ねた末、「最善ではないが改善の策として（内藤幸徳委員長の言葉より）」建設予定地を市営総合グラウンド（現在のクリーンセンター敷地）に決定しました。

建設予定地が決まり、本格的なごみ処理工場建設の開始にあたり、「よりよい施設で よりよいまちに」をスローガンとした「まちづくり委員会」も発足。ここでは、建物の外観をはじめ、設備内容、施設が周辺の環境にどのような影響を与えるのか調査・公表する環境アセスメントなど、あらゆる事項が検討されました。現役の清掃職員が委員会のメンバーとして参加したのも、当時としては異例のことでした。市民参加によって議論に議論を重ねた末、周辺住民の理解と苦渋の選択で、昭和57（1982）年から武蔵野クリーンセンターの建設工事が始まり、2年の歳月を経て、昭和59（1984）年5月に施設は完成し、試運転を経て10月からクリーンセンターは正式に稼働しました。シンボルである煙突は、市民意見を反映して白い雲と緑をイメージした、しま模様となり、景観配慮の観点から施設を囲むように大小7千本の木々が植えられました。



旧クリーンセンター建設中の煙突工事の様子

特筆すべきは、建設のプロセスだけでなく、稼働後の運営にも周辺住民を中心とした「武蔵野クリーンセンター運営協議会」が加わっていること。運営協議会には、クリーンセンターに関するあらゆる情報が報告され、定期的な議論が重ねられました。こうしたプロセスを経て、建設をめぐって一時は対立する関係にあった市と市民との間に、パートナーシップと呼べる信頼関係が築かれていったのです。

### 地球環境に配慮した

#### 開かれた次世代型施設

#### 2代目クリーンセンターへ

稼働から22年が経過した平成18（2006）年、施設の状況を調査したところ、廃熱ボイラーの耐用年数からすると平成26（2014）年から27（2015）年までに建て替えが必要との結果が出されました。ここでも再び市

民参加による協議や検討を実施、新しいクリーンセンターにふさわしい設備や機能などが議論され、より環境に配慮した次世代型施設の建設が構想されました。そして、平成28（2016）年12月、32年間運転を続けてきた旧クリーンセンターはその役割を終え、平成29（2017）年4月、旧クリーンセンターに隣接する2代目クリーンセンターへとバトンタッチ。

この運営にも引き続き周辺住民を中心とした「武蔵野クリーンセンター運営協議会」が加わり、クリーンセンターの運営状況の監視や地域への情報発信を行っています。運営協議会にはクリーンセンターに関する詳細な情報が開示され、今年6回開催される活発な会議によって、市民と市の間をつなぐ役割を果たしながら運営をサポートしていただいています。

武蔵野市環境部ごみ総合対策課の神谷淳一さんは、「ごみ処理は時代の流れに大きく左右されるもの」と言います。

かつてはごみ処理機能のみを担ってきたクリーンセンターも、技術革新によってさらにクリーンで安全・安心なごみ処理を行えるようになったことはもちろん、防災および地球環境や地産

地消エネルギーの拠点としての機能が付加され、「地域に新たな価値を創出する施設」となりました。

そして、旧クリーンセンターの一部を残し、リノベーションして令和2（2020）年11月に開設した施設「むさしのエコリゾート」も、クリーンセンターの歴史を後世に残すとともに環境啓発・教育を行う一体化施設としての役割を担っています。（神谷さん）

クリーンセンターをめぐる37年の歴史は、武蔵野市における市民参加のまちづくりを象徴し、次の世代に向けてごみや環境・エネルギー問題を考える上での大きな礎です。クリーンセンターの周辺住民だけでなく、ごみを出すすべての市民にとって、決して無関係ではないことを忘れてはなりません。



新クリーンセンター

〈参考文献〉  
・『武蔵野三鷹地区保健衛生組合のあゆみ』武蔵野三鷹地区保健衛生組合  
・『武蔵野クリーンセンター運営協議会30年のあゆみ』武蔵野クリーンセンター運営協議会